

ROSEリポジトリいばらき（茨城大学学術情報リポジトリ）

| | |
|------------|---|
| Title | 中国近現代図書館分類法の功罪に関する考察 |
| Author(s) | 立木, 正久 |
| Citation | 茨城大学人文学部紀要. 社会科学論集(55): 59-70 |
| Issue Date | 2013-03-29 |
| URL | http://hdl.handle.net/10109/3547 |
| Rights | |

このリポジトリに収録されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作権者に帰属します。引用、転載、複製等される場合は、著作権法を遵守してください。

お問合せ先

茨城大学学術企画部学術情報課（図書館） 情報支援係
<http://www.lib.ibaraki.ac.jp/toiawase/toiawase.html>

中国近現代図書館分類法の功罪に関する考察

Study on Merits and Demerits of the Modern Library's Classification in China

立木正久

抄録

従来の中国図書館史研究は、比較的、その時々¹⁾の社会問題との関連性を批判的に検討せずに分類法・目録学の考察に重きをおいていた傾向が見受けられる¹⁾。このため、近代中国の主だった人物が考案した各種分類法を社会的動向との関連も含め中国図書館の資料組織論を論じた先行研究はわが国ではあまり例をみない。そこで、筆者は社会的動向が及ぼす中国の近代的各種資料分類法の比較考察に光をあて、梁啓超らをはじめとする主だった人物が構築した分類法を論評し、かつ新中国後の図書館における資料分類法の功罪について論じていくことを本稿の研究目的とする。

I. はじめに

本稿は梁啓超らをはじめとした主な「図書館与文化名人」²⁾の足跡や新中国樹立後の動向を可能な限り念頭に入れ、中国の近現代図書館の各種分類法の功罪を筆者なりに考察することを主な研究目的とする。

インドの図書館学者、S・R・ランガナタンは『図書館学の五法則（以下、五法則）』のなかで図書館とは何か、その社会的役割は何かを次のように定義付けている³⁾。

- 第1法則：図書は利用するためのものである。
- 第2法則：いずれの読者にもすべて、その人の図書を
- 第3法則：いずれの図書にもすべて、その人の図書を
- 第4法則：図書館利用者の時間を節約せよ
- 第5法則：図書館は成長する有機体である

彼の五法則は中国近代図書館の分類法の比較論考とも関連性がある。特に「第4法則：図書館利用者の時間を節約せよ」は揺籃期の中国近代図書館における分類法の検証を行う

うえで重要である。そこでまずIIで先行研究について若干触れたあと、III以降で順次論旨を展開していくこととしてゆく。

II. 先行研究

これまでの先行研究は、中国近現代図書館の分類法・目録学の発展過程に関する考察が見受けられる傾向があった。その中でも代表的なものは杜定友と劉国鈞の業績であろう。

杜定友は論文「図書分類法史略」⁴⁾の中で、漢代の劉向から人民共和中国成立後に至るまでの中国の分類法の推移について考察している。

一方、劉国鈞は、書物の歴史研究⁵⁾のほか、解放後の中国において続々と誕生した社会主義国家建設に適合した種々の分類法を比較し、発展過程を論評している⁶⁾。同様に井波らも中国の目録学史に関する先行研究を行っている⁷⁾。これら先行研究の批判点としては、①杜定友については分類法の変遷に関する羅列中心の傾向があると思われること。②劉国鈞については社会主義国家建設に迎合していること。③井波については思想的偏りはない

が社会問題との関連性が希薄であることといった面があげられると思われる。

ところが近年、張几が、「中国の図書館の発展過程の歴史的考察」⁸⁾という論文を発表した。彼は“図書館は社会や文化の構成要素であり、社会の進歩、政治や経済の変革、文化及び思想の発展と密接な関係がある。「永楽大典」編纂事業に代表されるように、中国の図書館と歴代の政治・社会体制のあり方とは無関係ではない。”という趣旨のことを指摘している⁹⁾。社会問題からやや距離をおいた従来の分類法や目録学の研究とは趣を異にしており、変化の兆候が散見されるため、今後の動向を見守る必要があると思われる。筆者は基本的には、張几が述べる「中国の図書館と歴代の政治・社会体制のあり方とは無関係ではない」という考え方に立脚して、主に社会的動向との関連から中国近現代図書館分類法に関する論考を行ってゆくこととする。

Ⅲ. 蔵書楼—中国図書館の封建期

中国では長い間、図書館は「蔵書楼」とよばれてきた時期がある。このため本論に入る前に「蔵書楼」について概観することとする。

世界の図書館学者で、前出したランガタンの五法則の正しさを疑うものは今日、殆どいない¹⁰⁾。だが、過去の図書館界において彼の第1法則「図書は利用するためのものである」が軽視されていた時代が少なからずある。

歴史をふりかえると世界の図書館—たとえば英国の教会図書館（寺院文庫）—では中世まで、本が鎖でつながれていることが珍しいことではなかった¹¹⁾。図書館は、この当時、図書の利用を促進していくための施設ではなく、図書の保存を行うための施設と考えられていた。清朝末期まで「蔵書楼」と呼ばれていた中国の図書館でも、その傾向が顕著で

あった。一部の読書人等を除くと、封建社会の中国図書館は、ランガタンの前出法則とは逆行した“「図書は子孫のために保存するためのもの”である”¹²⁾という考え方により運営されていた。現代では「図書は利用するためのものである」、それゆえ人々に自ら学ぶ生涯学習の場を与え知力を蓄積させ、民主主義の担い手である人材を養成するところである—という原則が当然である¹³⁾。ところが中国では文字を使用する「士大夫」とも呼ばれた少数の「士」（役人）が文字を使用しない（読めない）民衆階層を支配してきた¹⁴⁾。当然、蔵書楼はごく一部の上流階級が使用するものであって文字の読めない庶民にとっては無縁な存在であった¹⁵⁾。世界に冠たる読書人を要していたとはいえ、清末期の1904年当時の識字率は僅か1%程である¹⁶⁾。官府蔵書をはじめとする蔵書楼は次の時代への図書館の基礎となる資料集積機関としては確かにすばらしい¹⁷⁾。しかし、古来からの蔵書楼は、“すでに完成していた「科挙」の制度のため、自由な学問研究と技術の発展は疎外され、歴代の王朝は自己権力の保全と、権威の誇示のための官府蔵書に力をいれていた”¹⁸⁾という保存中心の運営方法を原則的にとっていたために、利用者サービスを中心とする現代の図書館とは対極をなしていた。この資料提供サービスよりも保存中心という蔵書楼の運営思想は、ある意味において中国の封建時代の蔵書楼が有していた宿命的な伝統とも思われる。

ただ蔵書楼が保存機関に等しかったとはいえ、「閉架式図書館」ともいえる蔵書楼の特性は反面、書物に関する研究や書物の探索および保管などの研究に貢献し、版本学・校订学・目録学の発達等を促した¹⁹⁾。そのため蔵書楼が中国の古代からの貴重な資料を非常に長期にわたり、保管してきたことにより古典文明を保持し、現代人の学術研究や人類の英知の進歩に寄与し、文化の伝播と蓄積への

功績もあった点は評価してよい²⁰⁾。

Ⅳ. 梁啓超の諸活動と中国近現代図書館における資料分類法の比較考察

Ⅳ-1. 梁啓超の先見性

まず、中国史の転換期にあたり、近代図書館の重要性を訴えた人物の一人として、清朝末期から中華民国初期に活躍した政治家・学者でジャーナリストでもあり、かつ晩年には北京図書館長も勤めた梁啓超の名前をあげることができよう²¹⁾。梁よりもいち早く欧米の図書館の教育的な重要性を説き設立することを中国へ紹介したのは、アヘン戦争前夜の清末政府の官僚だった林則徐等だった²²⁾。しかしアヘン戦争以後、欧米の進んだ自然科学・社会科学を導入する手段として、図書館事業に熱心に取り組み始めたのは康有為等と共に代表的な改良主義者である梁啓超である²³⁾。

梁啓超は広東省新会県の出身である。1890年に科挙（官吏任用）試験の一つである会試²⁴⁾に失敗した後、同郷の康有為門下で、従来の漢学とは異なる今文学を学び欧米の近代思想等にも接した²⁵⁾。その影響もあり、梁は当時としては進歩的な考えを有し学識も極めて広がった²⁶⁾。彼は清末から民国初期の激動期において、戊戌変法を上奏した康有為とともに奔走し、絶えず問題提起をしたばかりではなく、後進への啓蒙にも多大な影響を与えた²⁷⁾。反面、改良主義・機会主義的な思想を保持していたため²⁸⁾、のちの李大釗・毛沢東らにみられる大胆な革命家ではなかった。

しかし梁啓超は中国図書館の近代への適応にあたり数多くの業績を残し、新たな出発の基礎を築いた。

以下、主だった彼の諸活動をとおり、分類

法も含め中国図書館近代化への功績を幾つか論じていく。

(1) 康有為との「強学会」創設

アヘン戦争後、清朝下の中国は、西洋の列強諸国に国土を蹂躪され、国家存亡の危機に瀕していた。このような絶望的な時代状況のもと、改良主義者である梁啓超は同志の康有為らとともに「強学会」を1895年に創設した²⁹⁾。そして雑誌『時務報』の発行を皮切りに図書館設立に着手した。梁啓超らが組織した「強学会」において設置された図書館「書蔵」は一般にも公開して閲覧利用に供した事情もあり、中国の近代図書館萌芽の一つともいえた³⁰⁾。このことをきっかけに、それまで閉ざされていた蔵書楼は続々と一般にも公開され始め、欧米の新しい学問書等を中心に多数の蔵書が民衆にとっても閲覧可能となり、詳細な規則にもとづく秩序のとれた収書・分類・編目・貸出等、それまで封建的であった中国図書館の管理運営の近代化が実施されていった³¹⁾。梁啓超らが率いた一連の「強学会」の活動は私的蔵書楼にも影響を及ぼし、自らが私有する蔵書を市民に公開する潮流が生まれた³²⁾。

取分け、古越蔵書楼は欧州の図書館規則を模倣して設立され、1904年以降、一般にも公開されるに至った。古越蔵書楼は目録「古越蔵書楼書目」³³⁾も整備し今日の公共図書館の源流となり、やがて「魯迅図書館」へと発展していった。このように「強学会」を康有為らと組織し、「書蔵」を設け閉鎖的な蔵書楼を公開化する道を築いたのは梁啓超の功績の一つといえる。

(2) 「西学書目表」の制定

「西学書目表」の制定は梁啓超が資料分類法の面で、後進への道筋をつけた最も顕著な業績といえる。

梁啓超は自ら創刊した雑誌『時務報』の誌面において、「西学書目表」という、それまでの四部分類に替わる図書分類法を1896年

9月に発表した³⁴⁾。不備な面も多々あったが、当時としては分類法のあり方について一定の影響を与えた。この「西学書目表」は次のように基本的には、三つの大分類と28の小分類で構成されている³⁵⁾。

<西学書目表>

【一】西学

- ①算学、②重学、③電学、④化学、
- ⑤声楽、⑥光学、⑦汽学、⑧天学、
- ⑨地学、⑩全体学、⑪動植物学、
- ⑫医学、⑬医学

【二】西政

- ①史志、②官志、③学制、④法律、
- ⑤農政、⑥曠政、⑦工政、⑧商政、
- ⑨兵政、⑩船政

【三】雑類

- ①遊記、②報章、③格致総、
- ④西人議論之書、⑤無可帰類之書

この分類体系を俯瞰してみると、四部分類からの転換期だった時代状況等もあり、現在の十進分類法と比較すると見劣りすることは歪めない。西洋の学問書をいかにして体系的に把握し、受容するか、どのように組織化すれば一定の根柢を確保できるのか、梁啓超が編成にあたって非常に苦心したことは明白である³⁶⁾。新しい分類体系の構築が大変な困難を極める作業であることを如実に物語る一例ともいえる。梁啓超自身も「西学書目表」を発表した後、「牽強付会の識りを免れることはできないだろう」と述懐している³⁷⁾。とはいえ、不備な面は多々あっても、三つの大分類と28の小分類を設けることによって、経書だけではなく新しい自然科学・社会科学にも対応しうる「西学書目表」をいち早く考案し先鞭をつけた彼の資料組織論の面での功績は大きいといえよう。ただ図書館利用率については、本稿執筆時点では具体的なデータが未入手のため明言できないことをお断りす

ると、清末期の人口が4億人余り³⁸⁾で識字率が前出のように僅か1%程であった時代状況から類推して、識字者数はおよそ400万人前後となるため実際の利用率は当時の識字率1%よりもさらに低かったのではないかと推測される。

(3)『清議報』掲載論文「論図書館為開進文化一大機関」の効果

梁啓超が日本亡命中に発行した雑誌『清議報』第17冊(1899年6月)に掲載された日本の雑誌『太陽』9号からの翻訳論文「論図書館為開進文化一大機関」³⁹⁾はそれまでの中国の図書館理念を一変させた。同論文では図書館の「八大利益」(以下、「八大利益」)⁴⁰⁾が強調されている。このことは梁が同誌と同様、亡命中に発行した雑誌『新民叢報』4号で提唱した「新民説」とともに当時の中国人を覚醒させ、社会の現実に目を向けさせたという点で後年、多彩な俊秀達が図書館活動を通して社会改革運動を展開する潮流へ継承される一つの伏線となった⁴¹⁾。

ただ雑誌『清議報』掲載の前出論文の正確な翻訳者が同誌を主宰した梁啓超かどうかは定かではない。しかしながら梁啓超が、まだ封建社会が色濃くのこる19世紀末の時代状況下で、早くも国力の充実を進めていく上で図書館活動の重要性に着眼して、日本亡命中とはいえ自ら主催した雑誌『清議報』に前出論文を掲載することにより、亡命先から中国にいる多くの同胞へ向けてこのような社会教育施設の設置を提唱した点は一考に値する。彼が主催した同誌掲載の前出論文で提唱した「八大利益」の内容は次のような骨子である。

- 第一の利：学生が「補充的智識」を得られる。
- 第二の利：学校教育を受けていない青少年が「必要的知識」を得られる。
- 第三の利：社会人が「参考的知識」を得られる。
- 第四の利：自由に研究することができる。

- 第五の利：僅かな時間で調査を行うことができる。
- 第六の利：無料又は僅かな料金を、貴重書や多くの図書を利用できる。
- 第七の利：世界各国の近況を知ることができる。
- 第八の利：勤勉進取の気性を養成することができる。

今日でこそ、これら「八大利益」で謳われていることは図書館の使命として当然のことだと認識されている。だが、梁啓超の生誕当時の中国の図書館は「蔵書楼」と呼ばれた一種の図書物置のような存在であり、必ずしも十分な教育施設とは言えなかった。

アヘン戦争敗北後の衝撃や混乱という時代背景を反映して、欧米からの図書館思想を前出「八大利益」として鼓舞する必要もあったのであろう。翻訳論文とはいえ梁啓超が自ら主催する『清議報』の誌面上において、前掲のように「第五の利：“僅かな時間”で調査を行うことができる」と提唱し、図書館で迅速な情報収集を行うには、近代的な分類法整備が不可欠であることを“僅かな時間”と婉曲的に暗示した点は、ある意味で正鵠を得た預言ともいえよう。このことは前出ランガナタンの「第4法則：図書館利用者の“時間を節約せよ”」とも相通ずるものがあるといえる。斯くの如き、梁啓超はジャーナリズムという新境地を開拓することによって、為政者のみならず民衆にも図書館の働きをとおして広く世界の出来事を俯瞰させるよう啓蒙した。このため彼は中国図書館界のパイオニアであると筆者は考える。「コロンブスの卵」という諺があるが、最初にこの役割を演じた梁啓超（および師匠でもある同志の康有為）の貢献は特記すべきことである。

ともあれ、後の中国図書館の近代化を草創期に開いたのは、梁啓超主宰の『清議報』がその一つであるといえよう。前出論文を掲載

した『清議報』の如きジャーナリズムという手法で図書館の社会的重要性を喚発した梁啓超は、大事な突破口を開いたと考えることができる。ただ、民国初期における近代化を阻む帝国主義・封建主義と正面から対決しえなかったこと⁴²⁾は、同時に梁啓超の図書館思想の限界でもあったと思われる。本格的な図書館改革事業の実践と発展は李大釗の登場を待たなければならなかった。

IV-2. 杜定友や劉国鈞らによる近代的資料分類法確立の功績

中国図書館界での近代的分類法の確立について、杜定友や劉国鈞らの果たした役割は多大である。先行研究でも少し言及したが杜定友や劉国鈞らの功績について紹介すると同時に、筆者なりの考えも論じてゆく。

魏徵らが編纂した『隋書経籍志』に代表されるように中国では昔から優れた分類目録を作ってきた伝統がある⁴³⁾。しかし従来のような経書・漢籍を対象とした四部分類では19世紀以後の近代科学を扱う外国書籍には対応できず区分整理の交錯があり、書架配列のための記号がないといった欠点があるため、図書館職員・利用者相互にとっても資料組織化や利用上、支障をきたしはじめていた⁴⁴⁾。最初、前述の梁啓超がこの課題に取組み「西学書目表」を作ったが諸般の事情や先行研究がほぼ皆無で時期尚早だったこと等もあり、西洋からの「新書」の分類目録の編纂用になりえただけで、六経を特別視した四部分類の欠陥是正までには至らなかった⁴⁵⁾。

この状況を一変させたのが幾人かの近代図書館学者が中国への適合を念頭に入れ考慮したデューイ十進分類法(DDC)⁴⁶⁾の踏襲・改良・刷新で、特に代表的なものは、1922年に杜定友が編集した「世界図書分類法」⁴⁷⁾、劉国鈞が1929年に編集した「中国図書分類法」⁴⁸⁾、及び王雲五が1929年に編集し

た「中外図書統一分類法」や何日章が1935年に編集した「中国図書十進分類法」である⁴⁹⁾。以下の類目表が示すようにVで後述するマルクス主義思想浸透を意図した「中国図書館図書分類法」とは趣を異にしている。

①杜定友編(1922年)「世界図書分類法」(D Cの“宗教”類目を“教育”に変更)

| | |
|----------|----------|
| 000 総類 | 100 哲学科学 |
| 200 教育科学 | 300 社会科学 |
| 400 美術科学 | 500 自然科学 |
| 600 応用科学 | 700 言語学 |
| 800 文学 | 900 史地学 |

②劉国鈞編(1929年)「中国図書分類法」(十進法に統一)

| | |
|------------------|-----------|
| 000 総部 | 100 哲学部 |
| 200 宗教部 | 300 自然科学部 |
| 400 応用科学部 | 500 社会科学部 |
| 600 史地部 (総記及び中国) | |
| 700 史地部 (各国) | 800 語文部 |
| 900 美術部 | |

③王雲五編(1929年)「中外図書統一分類法」(デュイ十進分類法を踏襲)

| | |
|----------|----------|
| 000 総類 | 100 哲学 |
| 200 宗教 | 300 社会科学 |
| 400 語文学 | 500 自然科学 |
| 600 応用技術 | 700 美術 |
| 800 文学 | 900 史地 |

④何日章編(1935年)「中国図書十進分類法」(デュイ十進分類法を踏襲)

| | |
|------------|-----------|
| 000 総合部 | 100 哲学部 |
| 200 宗教部 | 300 社会科学部 |
| 400 語言文字学部 | 500 自然科学部 |
| 600 応用科学部 | 700 芸術部 |
| 800 文学部 | 900 史地部 |

これら、民国期の分類法は劉国鈞の「中国図書分類法」を除くとデュイ十進分類法の模倣の感が拭えない⁵⁰⁾。だが杜定友や劉国鈞等が編集した資料分類法を中国近代化との

関連から『パソコン演習資料組織』⁵¹⁾を参考に類推すると、分類体系の面では次のような進歩を促したと思われる。

- i) いま存在している各々の個別の事物も、その体系のどこかに収めることが可能となる。
- ii) 体系を見ることで、利用者が対象としている事物の全体を俯瞰することが可能となる。
- iii) 体系上の個々の概念を表現している項目名称をもっており、書物の内容を知ることができる。
- iv) 体系により、さまざまな図書館資料を概念が大から小へ、広から狭へ排列することが可能となる。

かような点から分析すると、以下のようなことが考察される。

①杜定友や劉国鈞らが民国初期に考案した各種分類法は、中華人民共和国成立後にできた図書分類法とは違い、マルクス・レーニン主義関係の資料に重きをおいて最初の類目に配列することはせず、「日本十進分類法(NDC)」等、他の先進国の分類方法と同様、総類や総部(総記類)を最初に配置し、様々な思想の書物をバランスよく閲覧可能な体系である。

②このため利用者が多様な価値観の視点から資料を複眼的に比較して吟味し、広汎な思想を網羅的に受容する寛容の精神が身につく配慮がなされている。

③民主主義を人々に浸透させ良識ある市民を育て、一刻も早く近代国家を建設する一助となるべき情報センターとしての役割を資料組織論の面から果たしていこうとする民国教育部と先達者たちの意気込みが十分感じられる。

杜定友や劉国鈞、王雲五や何日章はこのように、図書館の資料組織論の観点のうえで本格的な近代化に貢献したといえる。また、劉国鈞の「中国図書分類法」については、漢籍の分類法に特色があるといわれるが⁵²⁾、彼の分類方法は、中庸に秀でていられると思われる。これらによって図書館職員の業務が効率化されただけでなく、利用者側にとっても、ランガナタンの前出第4法則“図書館利用者の時間を節約せよ”のとおり、各自、目的とする資料の探索が迅速化でき、サービス面で格段の向上を果たした。後年、杜定友も「図書分類法は社会意識の反映であって、社会経済の基礎と、上層建築の変化にともなって変化するものである。」⁵³⁾と述懐しているように、当時の中国は内憂外患の時期であった。しかし波乱の時代を克服しながら民国期の図書館は、一般市民の必要としている知識の啓発を行い、人々の視野を広げたと共に論理的思考力をも向上させ、ひいては現在の中国の発展の源泉となる一翼を担った可能性も考えられる。現に民国期当時における利用状況の一例を紹介すると、1921年設立の上海通信図書館は完全に公開された公共図書館で、通信貸出方式をとり、1925年の読者数は約5千人に達し⁵⁴⁾、市民が必要とする資料提供にある程度貢献していた（ただ民国期の文盲率が80%以上であったこと⁵⁵⁾を念頭にいれると、一般民衆の利用率は20%にも達しなかったのではないかと推測される）。このように民国期における杜定友や劉国鈞、王雲五や何日章らの活躍は資料組織論近代化という功績の点で再考すべきと思われる。

V. 新中国の図書館における分類法の功罪と近代化への功績

解放後における中国図書館の分類法を社会的動向との関連から概観すると、(1) 文革

以前、(2) 文革期、(3) 改革開放路線後一という時代区分で考察をすすめる必要があると思われる。以下、順次、論考を試みてゆく。

(1) 文革以前

解放後、中国共産党政権は社会主義・共産主義思想を労働人民に宣揚し、社会主義国家建設へ奉仕させることを目的とした図書館事業を展開しはじめた⁵⁶⁾。当然のことながら建国直後に続々と考案された各種分類法は次の「中国人民大学図書館分類法」(1952年制定)⁵⁷⁾にみられるように、マルクス・レーニン主義や毛沢東知識を高揚させる一翼となっている。

<中国人民大学図書館分類法>

- | | |
|------|-------------------------|
| 総合科学 | 1. マルクス・レーニン主義 毛沢東知識 |
| | 2. 哲学 弁証法 唯物論 |
| 社会科学 | 3. 社会科学 政治科学 |
| | 4. 経済学 経済政策 |
| | 5. 国防 軍事 |
| | 6. 国家及法権 法律学 |
| | 7. 文化 教育 |
| | 8. 芸術 |
| | 9. 語学 |
| | 10. 文学 |
| | 11. 歴史 革命史 |
| | 12. 地理 経済地理 |
| 自然科学 | 13. 自然科学 |
| | 14. 医学 衛生 |
| | 15. 工学 技術 |
| | 16. 農芸 畜牧 |

この資料分類法を分類体系の観点から民国期に考案された前出「中国図書分類法」等と比較考察すると、マルクスや毛沢東を美化する色彩が濃厚である。そのためランガナタンが「限らない民主主義」⁵⁸⁾と論じたように、多種多様な思想を市民に根付かせる教育機関である図書館本来のあり方からは逆行すると

断罪すべきであろう。だが一刻も早く社会主義近代国家を建設する緊急性のあった当時の国情を考慮すると、時代の要請がかような分類法の萌芽となった点はある程度斟酌すべきと思われる。

また解放直後の共産党政権にとって喫緊の課題は、前出の図書館事業はもちろん、『『文盲の国』からぬげださなければならない』⁵⁹⁾ことをかけた文教施策である。解放前の1946～1947年の時点の推計では、小学校入学率は20%前後で青壮年の文盲は80%以上であったといわれていた⁶⁰⁾。このため建国当初から共産党政権は成人の文盲一掃運動を支援するため、図書館をはじめとする「文化網」整備に着手した⁶¹⁾。また労働者・農民が働きながら学べる「民校」を設置し、様々な困難を孕みながらも1950年には1,372,000人、1951年には1,375,000人、1952年には156,000人というように次第に労働者・農民が文盲から解放されていった⁶²⁾。これら「文革」以前における建国当初の各種文教施策が、識字率を向上させ、のちの改革開放後にみられる図書館発展への布石となったのではないかと考えられる。

(2) 文革期

文革期は中国図書館にとって受難と迫害の時代であったともいえる。図書館事業の効能を否定し、「封建主義・資本主義・修正主義の害毒をばらまくもの」と規定して、図書館の唯一の性格を階級性と断定した⁶³⁾。また多様性を否定して図書館の役割を階級闘争に奉仕することへと変質させた⁶⁴⁾。そしてマルクス・レーニンと毛沢東主席の著書（例えば『毛沢東語録』）だけが有用であるとし、図書館職員の幹部には走資派のレッテルをはった⁶⁵⁾。このような社会的動向を反映して、「文革」中の1975年に制定された次の「中国図書館図書分類法」⁶⁶⁾は、杜定友が述懐したように文革期の「社会意識の反映」⁶⁷⁾が具現化された典型例ともいえる。

<中国図書館図書分類法>

マルクス主義、レーニン主義、毛沢東思想
 A マルクス主義、レーニン主義、毛沢東思想
 哲学
 B 哲学
 社会科学
 C 社会科学総論 D 政治
 E 軍事 F 経済
 G 文化、教育、科学、体育
 H 言語、文字 I 文学
 J 芸術 K 歴史、地理
 自然科学
 N 自然科学総論
 O 数理科学と科学
 P 天文学、地球科学
 Q 生物科学
 R 医学、薬学、衛生学
 S 農業科学 T 工業技術
 U 交通運輸
 V 航空、航天（宇宙飛行）
 X 環境科学
 総合性図書
 Z 総合性図書

本来なら近代図書館の分類法では先頭に総記類を配置し、マルクス・レーニン主義関係は社会科学の一分野とすべきである。

この分類法は図書館受難の時代であった文革期においても中国共産党政権が、図書館を愛国心養成施設として重視しただけではなく、党の政策の宣伝機関として思想善導を意図した証左ともいえる⁶⁸⁾。さらにこのようなマルクス主義・毛沢東思想の優位性を鼓舞する分類体系は、前出の杜定友らが民国期に考案した「世界図書分類法」等と比較分析し、かつナチズムを批判したある公文書⁶⁹⁾とも照合し考察すると、次のような社会問題を誘因する危険性を秘めていることが憂慮される。

- ①偏狭な国粋主義の助長
- ②ナチズムとも共通する過激な民族主義の推進機関化
- ③国家に無際限の権威を付与することへの一翼化
- ④家族よりも国家権力を上位に置く風潮の促進
- ⑤図書館が国家の神格化に加担する誤謬

上記の如き、「無神論ガリア主義の東洋版」⁷⁰⁾とも揶揄できるマルクス主義・毛沢東思想を神格化する「国家イデオロギー宣揚型」分類法の誤謬は、「狂乱の十年」や文革期における中国社会の停滞という史実が立証したのではなかろうか。

(3) 改革開放後

改革開放後の今日、一例を紹介すると、1996年に新築開館された上海図書館には1日に平均9千人もの利用者がおり、図書と閲覧、レファレンス、講演会、展示会、文化的集まり等、サービス業務は多岐にわたる年中無休の活発な図書館活動を展開している⁷¹⁾。同館に代表されるように現代の中国図書館界は活況を呈している。反面、民主主義の土台であるはずの図書館が特定政党の半ばプロパガンダ機関化している矛盾も抱えている⁷²⁾。前出「中国図書館図書分類法」は国家イデオロギー宣揚の一例ともいえよう。

しかしながら、中国の場合、分類法を海外出版物と国内出版物とでは二つに分けた特性を有している⁷³⁾。国内出版物の分類法の場合は前出のように、マルクス主義理論・自然科学・社会科学等をアルファベットで表し人民に社会主義や愛国主義教育を実施する思想的基盤の一環となっている。一方、海外出版物については、日本とほぼ同じ十進分類法を使用しており、人民が様々な分野の海外情報を（共産圏故に一定の制約が仮にあったとしても）可能な限り習得できるような配慮が施

されている。

もともと中国の場合、「永楽大典」編纂作業にみられるように、図書館は民衆の要求からではなく、国の政策的な位置づけの一つとして古から現代に至るまで設立されている⁷⁴⁾。このため、先進国やインド等の諸外国の図書館とは趣を異にしている。抗日戦争終息前後から共産党が党の宣伝もかねて計画的に図書館設置作業を進めた過去の経緯もあるため⁷⁵⁾、前出「中国図書館図書分類法」が物語るようにマルクス主義に偏る難点が散見されることは民主主義の砦である図書館本来の姿とはいえ、この点は負の面として批判しなければいけない。

だが反面、思想善導をも意図した革命後の分類法は、一面においては利用者への各種の資料提供に貢献し、結果的に庶民に多彩な教養を会得させ知的向上を促す一翼ともなった⁷⁶⁾。それがのちに科学技術水準を押し上げていき、ある点では今日の経済発展の原動力の一つになりえたともいえる。解放後の中国における図書館利用率を推測するうえで一つの指針となる読書活動の普及率について、江蘇省江陽市を例示すると、利用促進を図るための読書活動を開始した1995年の時点では普及率は3%にも満たなかったが、文化部の努力もあり、1996年には21%にまで向上した⁷⁷⁾。また1999年に夜間型図書館として開館した大連市図書館の利用状況を一例として紹介すると、毎晩数百人の利用者が来館し、1日平均で3000人、最も多い日には5000人もの市民に利用されている⁷⁸⁾。識字率が僅か1%程であった清朝末期とは隔世の感がある。このように、かつて一部のエリートを除くと成人の識字水準が低すぎたこと⁷⁹⁾が富国強兵上、支障をきたす一面もあった中華民国時代とは異なり図書館を取り巻く社会的状況は概ね一変した。かくして前出「民校」等の諸施策も功を奏し、新中国成立後における図書館の資料分類法は種々の矛盾を孕みなが

らも、人々へ蓄積された文化の公開や伝播を行う社会教育の場として機能し始める一助となり、中国近代化への貢献に寄与した功績もあるのではないかと筆者は考える。

1950年代の「大躍進」華やかしころ、「社会主義は天国だ。しかし文化がなければのぼれない」という嘆きが巷でいわれていた⁸⁰⁾。だが「文革」終焉後、改革開放路線以降の中国の図書館は、知識基盤経済国家の建設をより強固にするうえで（共産圏ゆえの限界があるとはいっても）大局的思考を労働農民大衆へ根付かせるために利用者サービスの向上が求められ始めた⁸¹⁾。加えて、情報化社会の到来や技術革新も追い風となった⁸²⁾。鍵を掛けて保存しごく一握りの特権階級の醸成機関でもあった封建期の蔵書楼等とは異なり、孔子が『論語』で説いた「教養をひろめる」⁸³⁾ 市民教育機関へと大きく脱皮した。中国近代以降の図書館は、封建時代の「読書人」を広範囲の民衆へ広げていく役割もはたしたといえる⁸⁴⁾。特に前出の上海図書館では年中無休利用者サービス等が行われ⁸⁵⁾、活況を呈している。現代中国図書館の資料分類体系はマルクス主義・毛沢東思想を先頭におく思想的に偏った分類法という問題点を孕んではいるが、上海図書館の発展にみられるように一種のルネッサンス現象の勃興をも誘発している正の側面も担っているともいえよう。

VI. おわりに

以上、梁啓超らをはじめとした主だった「図書館与文化名人」の足跡や新中国樹立後の動向を中心に、中国図書館の近現代分類法に関する功罪について論評してきた。

最後に今後、中国の図書館が進んでいくべきあり方について私見を幾つか披瀝する。

①原則無償サービスへの回帰

近年、中国の幾つかの図書館では利用者に

対して徴収料を請求している⁸⁶⁾。ランガナタンが提唱した前出の第2法則「いずれの読者にもすべて、その人の図書館を」という利用者への機会均等という図書館のあり方からいえば望ましい運営方針ではない。早急に是正し市民への無償利用サービスという原点に立帰るべきである。

②図書館司書は勇気もつこと

日中戦争や国共内戦のころ、中国の図書館司書は、書籍を戦火から守るため貴重な文献を安全な地域に移し、古より伝播されてきた知識の宝庫である図書館を命がけて守った⁸⁷⁾。今後も天安門事件にみられるような危険な時代がおきない保障はない。中国の図書館司書は政局に左右されない勇気が必要であろう。

③学識や教養の研鑽

中国の図書館司書は、ランガナタンが提唱した前出の第1原則「図書は利用されるためのものである」という使命を全うし市民への生涯学習を支援し続けるため、今後も幅広い学識や教養を絶えず習得する研鑽が必要ではないかと思われる。

④電子資料の刷新

ランガナタンが前出第4法則で強調している“図書館利用者の時間を節約せよ”を実効化するため、今後も絶えず電子資料の刷新に一層努めるべきである。

以上のとおり、重要人物の足跡も鑑み中国近現代図書館分類法の考察を筆者独自の観点も加味しながら試みてきた。より多くの碩学の方々が近代以降の中国図書館の検証研究に取り組まれることを願いたい。

結びに本論文のまとめとして、社会的動向との観点から、中国近現代図書館分類法の功罪に関する比較考察研究が今後、わが国でますます発展してゆくことを切望し筆を終える。

【注および参考文献】

- 1) 一例として清水茂『中国目録学』（筑摩書房、1991年、188p）があげられる。
- 2) 陳燮君・盛異晶主編『二十世紀図書館与文化名人』上海科学院出版社、2004、p. 1-116。梁啓超らは同書のなかで“図書館与文化名人”と呼ばれ中国近現代図書館界の功勞者として評価されている。
- 3) S. R. ランガナタン著；森耕一監訳『図書館学の五法則』日本図書館協会、1981、p. 9。
- 4) 杜定友選；松見弘道訳『図書分類法史略』『図書館界』第10巻3号、日本図書館研究会、1958年8月、p. 87-91。
- 5) 劉国鈞・鄭如斯著；松見弘道訳『中国書物物語』創林社、1983、225p。
- 6) 劉国鈞・史永元著；酒井忠志訳「解放後における中国図書分類法の発展」『同志社大学図書館学会紀要』第3号、同志社大学図書館学会、1960年12月、p. 33-43。
- 7) 井波陵一『知の座標：中国目録学』白帝社、2003、228p。
- 8) 張几「中国の図書館の發展過程の歴史的考察」『情報学= Journal of Informatics』第8巻1号、大阪市立大学、2011年、p. 69-74。同誌は電子紀要[2012年11月9日確認]
(URL:http://dlisv03.media.osaka-cu.ac.jp/infolib/user_contents/kiyo/111S0000001-0801-7.pdf)
- 9) 張几、前掲論文、p. 74
- 10) 竹内愨解説『図書館の歩む道』日本図書館協会、2010、p. 3。
- 11) 和田万吉『図書館史』慧文社、2008、p. 92-93。
- 12) S. R. ランガナタン著；森耕一監訳、前掲書、p. 130-131。
- 13) 同書、p. 79-131
- 14) 寺田光孝編『世界の図書館：図書館メディア双書2』勉誠出版、1999、p. 120-121。
- 15) 同書、p. 121
- 16) 石井敦編『図書および図書館史：講座図書館の理論と実際10』雄山閣、1990、p. 207。
- 17) 張几、前掲論文、p. 69。
- 18) 寺田光孝・藤野幸雄『図書館の歴史』日外アソシエーツ、1994、p. 41
- 19) 吳建中・塩見昇・川崎良孝『21世紀の図書館を考える』京都大学図書館情報学研究会、2001、p. 13。
- 20) 張几、前掲論文、p. 69。
- 21) 下中直人編『世界大百科事典』第29巻、平凡社、2007、p. 681-682。
- 22) 寺田光孝・藤野幸雄、前掲書、p. 143
- 23) 謝灼華主編『中国図書と図書館史』武漢大学出版社、1987、p. 219-224。
- 24) 近藤春雄『中国学芸大事典』大修館書店、1978、p. 67。
- 25) 下中直人編、前掲書、p.681-682
- 26) 同書、p.681-682
- 27) 下中邦彦編『アジア歴史事典』第9巻、平凡社、1962、p. 298-299。
- 28) 同書、p. 298-299。
- 29) 藤野幸雄『図書館史・総説：図書館メディア双書1』勉誠出版、1999、p. 157-158。
- 30) 寺田光孝・藤野幸雄、前掲書、p. 143-144。
- 31) 寺田光孝編、前掲書、p. 114-133。
- 32) 寺田光孝・藤野幸雄、前掲書、p.142 - 144。
- 33) 呂紹虜『中国目録学史稿』安徽教育出版社、1984、p. 199 - 200。
- 34) 同書、p. 196-198。
- 35) 同書、p. 198。
- 36) 井波陵一、前掲書、p.53 - 54
- 37) 同書、p. 56。
- 38) 国連 World Population Prospects:The 2008 Revision (1950年～2050年、中位推計) < URL:<http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/8280.htm> (2012年11月8日確認) >
- 39) 中華書局編輯部編『清議報』第6巻、中華書局、1991、p. 1073-1078。
- 40) 浜口充子・岸本美緒『東アジアの中の中国史』放送大学出版振興協会、2003、p. 137。
- 41) 金冲及主編；村田忠禧・黄幸監訳『毛沢東伝 上：

- 1893 - 1949] (みすず書房、1999) p9-10 でも言及されているように毛沢東も梁啓超の思想的影響を受けた一人である。
- 42) 下中邦彦編、前掲書、p. 298-299。
- 43) 鮎澤修・芦屋清『資料分類法:現代図書館学講座 4』東京書籍、1988、p. 28-29。
- 44) 井波陵一、前掲書、p. 52。
- 45) 同書、p. 53-59。
- 46) 「デュイ十進分類法 (DDC)」類目表
000 総記 100 哲学 200 宗教 300 社会科学
400 言語 500 純粋科学
600 技術 700 芸術 800 文学 900 地理・歴史
- 47) 杜定友選; 松見弘道訳、前掲論文、p. 89。
- 48) 鮎澤修・芦屋清、前掲書、p. 30。
- 49) 張樹三撰『中文図書分類之原理及実務』台湾中華書局、1977、p. 49-59。
- 50) 杜定友選; 松見弘道訳、前掲論文、p. 89。
- 51) 堀込静香〔ほか〕著『パソコン演習資料組織』日本図書館協会、2003、p. 86。
- 52) 劉国鈞著; 松見弘道訳『図書の歴史と中国』理想社、1963、p. 248。
- 53) 杜定友選; 松見弘道訳、前掲論文、p. 90。
- 54) 石井敦編、前掲書、p. 225。
- 55) 竹内禮子『心を育てる読書』明るい生活社、2005、p. 228。
- 56) 岡田温編『世界の図書館』日本図書館協会、1966、p. 186。
- 57) 鮎澤修・芦屋清、前掲書、p. 31。
- 58) S. R. ランガナタン著; 森耕一監訳、前掲書、p. 273。
- 59) 世界教育史研究会編『世界教育史大系 36: 社会教育史 II』講談社、1981、p. 216-217。
- 60) 姫田光義〔ほか〕著『中国 20 世紀史』東京大学出版会、1993、p. 215。
- 61) 世界教育史研究会編、前掲書、p. 217。
- 62) 同書、p. 220-221。
- 63) 石井敦編、前掲書、p. 229。
- 64) 同書、p. 229。
- 65) 同書、p. 229。
- 66) 鮎澤修・芦屋清、前掲書、p. 303。
- 67) 杜定友選; 松見弘道訳、前掲論文、p. 90。
- 68) 張几、前掲論文、p. 69。
- 69) ピオ 12 世著; 岳野慶作訳『スムミ・ポンティフィカツス』中央出版社、1962、p. 55-106。
- 70) E. ノーマン著; 月森左知訳『図説ローマ・カトリック教会の歴史』創元社、2007、p. 221。
- 71) 呉建中著; 川崎良孝〔ほか〕訳『21 世紀の図書館』京都大学図書館情報学研究会、2007、p. 213。
- 72) 張几、前掲論文、p. 69。
- 73) 同論文、p. 69。
- 74) 同論文、p. 69。
- 75) 謝灼華主編『中国図書と図書館史』修訂本、武漢大学出版社、2005、p. 446-451。
- 76) 前掲『21 世紀の図書館』p. 193 によると、2000 年の時点において 4 万の村が図書館ないしは閲覧室を設置しており、中国での図書館振興策は地方にも及んでいる一例が紹介されている。
- 77) 呉建中・塩見昇・川崎良孝、前掲書、p. 119。
- 78) 同書、p. 179。
- 79) 竹内禮子、前掲書、p. 228。
- 80) 世界教育史研究会編、前掲書、p. 226-227。
- 81) 呉建中・塩見昇・川崎良孝、前掲書、p. 173。
- 82) 同書、p. 189-190。
- 83) 孔子〔著〕; 久米旺生訳『論語: 中国の思想 9』徳間書店、1996、p. 102。
- 84) 呉建中・塩見昇・川崎良孝、前掲書、p. 118-119。
- 85) 呉建中著; 川崎良孝〔ほか〕訳、前掲書、p. 213。
- 86) 寺田光孝編、前掲書、p. 130。
- 87) 張几、前掲論文、p. 72。